

教 仁 名 聞

第19号
(発行日)

2012年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

自我心のすがた

私という人間の中心にどつかと居座っている自我の心はどんな心として起こってくるのであろうか。少し列挙してみよう。

自我は欲深い。

自我は怒りっぽい。

自我は嫉妬深い。

自我は人に勝ちたい。

自我は自分を知者だと思っている。

自我は肉体を自分としてつかむ。

自我は自分を張り立ててやまぬ。

自我は自分を善人と思いたい。

自我は人を責めやすい。

自我はなにかにつけ不足をいう。

自我はたかぶる。

自我はとかく自己弁護をする。

自我は自己評価をいつも気にする。

自我は損をするのが頗る嫌い。

自我は得をするのが大変好き。

自我は他者がほめられるのがうとましい。

自我は自分を人と比べる。

自我は生活不安をいつももつ。

自我は己のした善をほこる。

自我は自己宣伝をしたがる。

(しかし、自我はいわゆる

「私」であり、自分と他者を

分け、判断し、選択する機能

でもあるから、この世を生きる

かぎりにおいて必要な働き

でもある)

自我を軸足とし、自我を中

心に生きようとする。そうす

ると右のような罪悪心が起こ

ってくる。

そればかりか、自分のこう

した心の有様を知っても、「こ

れほど私は悪くない。私はも

っとまじな人間だ」と自己肯

定をする。それがまた自我心

である。容易に自分の悪を認

めようとしない。あるいはこ

うした心の有様をあえて見

ないようにする。その方が楽

だし、自己批判をすることは

苦しいから。

福本常蔵同行の『かぞえ歌』

に(以下抜粋)

腹は立ちづめ がまんはしづ

め ご恩報謝にや 懈怠はしづ

め 減そう減そうと思ひし欲は

思う下からわき出る私。

取ろう取ろうにや心が飢えて

深夜とろりと目を醒ます。

理屈理屈と理を非に曲げて

人に罪・とが塗りたい私。

塗りて隠して善い顔つきで

知らぬ顔しているのが私。

欲の話にや夜の目も覚ます

法の席には昼でも寝ます。

礼儀作法は人目と義理に

い つもすすんで出るのが私。

ねてもさめても御恩にやむか

ぬ 私や五欲においせめられ

て。

ないじゃあるじゃの処世にと

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日(日) 午後二時始

講師 藤谷知道師(大分県宇佐市)

れて お寺参りをせぬのがわたし。 楽がしたいと苦の土の娑婆で

無理の願いをするのが私。

飲もう食うにはよく気がつけ

ど わたしや御恩を忘れて暮

らす。

鬼の迎えを受けると聞けど

わたしや蛙でつらに水。

慳貪邪見なわたしが生地を

塗れど隠せどかどからはげ

る。

不実ばかりで上べをかざる

わしの心は大蛇か鬼か。

虚仮で不実で愚鈍で愚痴で

とろう処のないのがわたし。

手には珠数持つうやまいかけ

て 仏さままでだまかしつめ

る。

欲のためには此の目が見えぬ

人に見られて恥じかくまで

は。

むごいものいな私が生地は

悪いものとは口ではいえど

なにに付いてもわたしが善い

で 悪い心は真実しれぬ。とあるが、自我の姿がよく表されている。

こういう自我の心を何とかしたいと思ひ、真面目に「このような浅ましい心を何とか改善したい」「努力すればましな心になるに違いない」という自己改革にはげむ道もある。

宗祖親鸞聖人は初めは自らの修行で自我心を克服して、浄らかな仏心になろうとして比叡山で長年の自力の修行をされた。しかしその結果、源信僧都の仰せの如く「煩惱は凡夫の自体なり」で自我心は凡夫の自体であつて、これをどうすることもできないという壁にぶつかられた。

実際、この自我心をなんとかしたいと思つても、いかんともしがたいものである。また、自我の罪を多少知つても、悲しいかなその罪をどうすることもできないのである。

そして聖人は比叡山を下り、京都の吉水におられた法然聖人をたずね、お念仏の教えを聞かれた。そして南無阿彌陀仏の大悲のお心に救われたのである。

阿彌陀仏の大悲を聞き、大悲心にあうと、阿彌陀仏の無碍光の徳力によつて不思議にも大悲の心は自我心に到り届き、もはや決して我らの心に離れなくなる。

その結果、自我心はこれもなくすことは出来ないけれども、自我心に仏心（大悲心）を信心として頂くことができる。

そうするとその仏心は自我心を深く照らし出し、自らの煩惱の深いこと、悪の深いことを露わにし、慚愧せしめて下さる。

自我心のおぞましさを知らされ、そして「これが私の心の有様なのだ」と素直に自分の悪を承認させられる。

それは仏心大悲が自我の罪深いままを受け入れて下さつて居るからである。阿彌陀仏に受け入れられてあるからこそ、自心の罪を自分の罪として認めることができるのである。

もし大悲心によつて私が受容されていなければ、自分の罪を罪として頑として認めようとしなのが自我心でもある。

正信偈に学ぶ問答

(四十)

天親菩薩論註解 報土因果願誓願 往還回向由他力

（書き下し） 天親菩薩の『論』、註解して、報土の因果、誓願に願す。往・還の回向は他力に由る。

（現代語訳） 曇鸞大師は天親菩薩の『浄土論』を注釈して、浄土を建立された因も果も阿彌陀仏の誓願によることを明らかされた。往相も還相も他力の回向であると示された。

*

A 「今回は（往相も還相も他力の回向であると示された）というところですが、往相とは何ですか」
D 「迷いの領域からさとりを開く浄土に生まれて往く相（すがた）のことで、私たちが浄土に生まれていくことです」

A 「では還相とは」
D 「浄土から逆に迷いの領域である穢土に還つて衆生を救

う働きをすることです。往相で浄土に至り、菩薩となつて衆生を救うために穢土に還つてくることを還相といひます」

A 「往相も還相も他力の回向である、というのは」
D 「往相も還相もすべて阿彌陀仏のはたらき（回向）によつて実現するのである、といわれるのです」

A 「回向というのは」
D 「廻らし向かう、ということとで阿彌陀仏の大悲の力が迷い苦しむ衆生に向かつて働きたもうことをいいます。往相の回向とは、たとえば磁石が鉄釘に働いて鉄釘が磁石によつて引き寄せられるようなものです。鉄釘が磁石にひつつくのは鉄釘の力ではなくて磁石の力であるように、私たちが浄土に至るのは私たちの力によつてではなくて、阿彌陀仏の大悲の力が私にはたらきかけて下さるからです。これを往相は本願他力の回向に由るといわれるのです」

A 「では還相が他力の回向に由るとは」
D 「さきほどの磁石のたとえで云いますと、磁石の力が鉄釘に加えられると、磁気を帯びた鉄釘が他の鉄釘を引き寄せられるように、浄土に生まれるれば、本願他力の力によつて、菩薩となつて迷いの境界に還り、迷いの衆生を救済することができるようになる。これを還相も他力の回向に由ると仰せられるのです」
A 「往相も還相も回向したまう本願他力に由るといふのを、磁石と鉄釘でたとえられました。そこをもう少し詳しく話して下さい」
D 「私たちは小さなバラバラな鉄釘のようなものです。その鉄釘に強力な磁石を近づけると磁場の磁力が鉄釘に届いて、鉄釘に変化が起こります。いわゆる磁石のN極に対して鉄釘にS極ができ、強力な磁石（N極）の力にその鉄釘（S極）が引き寄せられます。そのように、浄土の働き（本願力）が私に働くと、本願力のお働きによつて私の心に信心が起こります。そうすると信心が因となり本願力の強力な

(了)

縁に引きつけられて浄土に至るのです」

A 「磁石の磁力は鉄釘に働いて鉄釘の内容を変えようように、本願の働きが私に働いて、

それによって教化されて私の中に信心が起ころのですね」

D 「ええそうです。この信心が因となり、その因が大悲の願の強力な縁に引きつけられ導かれて浄土に往き生まれるのです。そのところを聖人は『行巻』

（悲願は）、なお磁石のごとし、本願の因を吸うがゆえに」と仰せられています」

A 「（本願の因）とは」

D 「本願による往生の因ということです」

A 「では還相が本願他力に由るといわれるのは」

D 「先ほどのたとえで云えば、鉄釘に磁石の力が加わると鉄釘も磁石の働きをして他の鉄釘を引き寄せるようなものです。もつともこの場合の（鉄釘）はこの世の私の肉体のままというのではなく、この世での命を終えてから、衆生を救うために迷いの世界にさまざまに現れるすがた形においてのことといわれますが」

A 「確かに、鉄釘に磁石の働

きが加えられると鉄釘自身が磁石になりますね。そうすると磁力を与えられた鉄釘はまた磁石のようになって他の鉄釘を引き寄せますね」

D 「ええそれと同じように、浄土に生まれると阿弥陀仏の本願力を帯びた菩薩は迷いの世界に還って衆生を浄土（真実世界）に引き寄せることができましょう。ですから還相して他の衆生を救う働きをさせていただけのも本願他力に由るといわれるのです」

A 「（往還の回向は他力に由る）のであると曇鸞大師はお示し下さったと、聖人は大師を讃えておられるのですね」

D 「ええそうです」

A 「もう一つお聞きしたいのですが、この世で私たちに本願他力の大悲のお働きがかけられて浄土に至らせていただくことはよく分かりましたが、本願他力の働きが私に加わると自分も磁石になるのだから他の人たちを救うような働き、いわゆる利他の働きが現在の私たちにもできそうに思いますか、それは無理なんでしょうか」

D 「おっしゃるとおり、本願力が届いて信心になって下さ

るので、私たちにも磁石の働きができそうに思いますが、しかしながら私たちは極めて重い業を抱え、その結果としての肉体の身を生き

ていますから、たとえ本願のお助けに遇わせていただいてもそのような業を抱えている私たちが他の人たちを救うというような働きは極めて限られています。しかし、ないわけではありません」

A 「ないわけではないというのは限定的だけど、あるといわれるのですね」

D 「ええ、それは私の上に働いて下さる南無阿弥陀仏の力が私を通して他の人たちに働いていくという限りにおいて

です。ただ私たちは業報の身、煩惱の深い身ですから、南無阿弥陀仏の働きを邪魔ばかりしているの、なかなか他の人たちに伝わっていきません。それゆえ（私は還相の菩薩として他の衆生を助けている）などとは私の方からはとても言うことはできず、むしろ阿弥陀仏のお働きの邪魔ばかりして申し訳ありません。慚愧するほかはありません。けれども南無阿弥陀仏の働きは確かに我が身を救い、私に大悲のお心を現わして下さい

ますから、その南無阿弥陀仏の慈悲の力が自然に他の人たちに伝わっていつて他の人たちを救いに導いていくということはありません」

A 「この世で他の人たちが私を縁として救いに導かれるとしても、それはどこまでも私に働いて下さる南無阿弥陀仏御自身の大悲のお徳によつてなのですね」

D 「ええそうです。自利も利他も南無阿弥陀仏のお働きです。ですから聖人は南無阿弥陀仏に助けられた者は御報恩のために念仏をよくよく申しなさいと仰せられています。『正信偈』では

ただよく常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべしと仰せられています」

A 「お念仏を申すこと、そのことが南無阿弥陀仏が他の人たちに伝わる縁になるということですね」

D 「ええそうです。南無阿弥陀仏の言葉は他の人々に自ずと伝わる徳をもっているの、しよう。有難いですね」

A 「連鎖的に共鳴していく力が南無阿弥陀仏の功德に具わっているのですね」

D 「ええそう思います。ですから報恩の念仏をよくよく称

えよと聖人はお勧め下さるのです。ただどこまでも、称えた私の努力で他に伝わるのではなく、称えられる南無阿弥陀仏の功德によつて伝わるのです」

A 「それと、いろいろな善を行うことが報恩になるとよく聞くのですが、こういう意味はないのですか」

D 「南無阿弥陀仏をいただく、仏心が届いて下さいますから、悪をいとい善を行いたく湧いてきます。それも南無阿弥陀仏をいただいたればこそです」

A 「南無阿弥陀仏の仏心は人に届いて、少しづつであつても悪をいとい善におもむくようにする尊い功德があるので

すね」

D 「ええそうです。それで、信心の上から少しづつであつても悪をやめ善を行うことは南無阿弥陀仏の功德を証しすることにおのずとなり、南無阿弥陀仏を讃えていることに自然になつていくのです。そういう意味から善を行うことはお念仏の尊さを証し、お念仏が弘まる縁になりますから報恩の行に連なつてまいりま

信心夜話

『一蓮院談合録より』(15)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

(一蓮院) 師いわく。

「信次郎、今晚は、大講師の御法座ゆえ、総会所へ参りてこい。私は留守をするほどに、覚えて帰るではない。よく聞いてきて聞かせてくれ」

と。帰って来るのを待ちかねて

「信次郎はどうであった」

と。信次郎は謹んで

「今日の御教化は唯この私を御助けくださる事で御座りました」

師いわく

「それは有り難い事を聞いてきてくれたなあ」

(真宗の法話は、阿弥陀仏のお助けが説かれないと、話としては完結しない。私たちの浅ましさを悪業を説くだけで終わるのは真宗の法話としては完結していない。真宗の法話はいつでも一回かぎりで完結していかねばならない。お助けの話は明日にまわすなら、今晚死ぬかもしれず、今晚死ぬ人は助からぬ。また法話を聞く側も、阿弥陀仏はこの私を助けて下さる)を聞いてこそ、聞くべき事

を聞いたといえる。どれだけ長い間聞いても、私が阿弥陀仏の大悲に助けられることを聞かねば、聞き損ないである。信

次郎氏は聴聞の要をよく心得ていた人であり、法話の要を一言(私を御助けくださる事で御座りました)と一蓮院師に話し、一蓮院師は、(それは有り難い事を聞いてきてくれたなあ)と喜ばれた。信次郎氏も一蓮院師とともに同じ真実を仰いでおられる。(私をお助けくださる事で御座りました)といわれる内容は常なる真宗のお話でありながら、それを聞くのはいつも新しい喜びであり、新鮮な感動がある。その外のなんぞ変わったことや珍しい話を聞いてまわるのは、真宗の聴聞ではない)

*
助けるとあるお声ばかりで、私は充分じゃ。有り難い事じゃ。

(真宗の信心は聞即信で、聞くままが信じていることなのである。何を聞いているのかというと、(助ける)という声を聞いているのである。(助ける)のお声一つで生死の苦海を渡らせていただけるのである。(助ける)のお声において大悲の親にあうのであり、あっているのである。撰取して捨て給わざる救い主にあうのである、あっているのである。そこに充足するのである。阿弥陀様の慈悲のお心で充たされるのである。ああ有難いという外はないのである。これがその

つどそのつど、反復していく。

だからといって、我が心に有難い思いを探したり、求めたり、あるいは有難い心が起きると(これでこそ信心があるのだ)と、自分の中に信心を確かめる必要はさらさら無い。それは自分の心に(有難い心)を見ようとする、いわば助かるしるしを見ようとしているのであって、自分の心への執心である。自力の計らいである。

南無阿弥陀仏の声は私の声でありつつ阿弥陀仏の声である。阿弥陀仏は願行成就して南無阿弥陀仏の声にまでなつて私を助けに来られている。私の往生の因をすべて願行成就して喚んでいたもう。ただ、ナムアマミダブツの声や言葉は心の現れ、念仏の声を通し、お言葉を通して、(助ける)の大悲心を聞くのである。耳に聞こえるナムアマミダブツは称える念仏を通して現れたもう阿弥陀仏の願力である。(ナムアマミダブツ)と聞くと「罪悪深重の助からぬ汝を助ける」「浄土に連れていく」「ここに助ける親がいるぞ」との思し召しを聞くのである。(ナムアマミダブツ)と、阿弥陀様が私のような者を引き受けて(助ける)と、声を限りに喚んで下さっているのである。

勿論、お念仏を聞いて、いつもかも(ああ有難い)と喜んでいくわけではない。平生は何ともないし、何ともなくても困りはしない。南無阿弥陀仏様は(喜ばねば助けぬ)とも、(嬉しい心がないと助からぬ)とも仰せられていない。(お前のその心のままで助ける)と仰せられている。それを聞いて、ああ有難いと時々思わしてもらえないまでも有難いし、有難いとも何ともないままでも許されていることも有難い)

《住職雑感》 西田幾太郎の『哲学

概論』に、著名な哲学者のフェヒナーの経験が書かれていた。彼が公園のベンチに座っている時、(まはりには蝶が飛び、緑の芝生が見える。その時彼はこう思った。(物理学の立場からすればすべてはアトム(原子)の運動であり、畢竟光も色も音も、アトムの運動にすぎない。本当の意味では、光も色も音もない。物理学の世界は云わば夜の光景である。しかし光も色も音もある直接の世界が世界の真の姿ではないか。云わば昼の光景が世界の真の姿ではないか)とはつと気がついたという。実際そうだと云える。バッハの受難曲の演奏を聴く。演奏された音は空気の振動(原子の)として耳に入り、それは神経細胞を通して、電気的化學的な反応として脳に伝えられ、脳の聴覚野を興奮させ、電気的化學的な信号として脳の中核に至るといふ。そこまでは脳の反応を実験で観測することによって突き止められるといふ。しかし、音楽が耳に届いて起こす脳内での物質的な反応現象と、それを聞いている心的事実とは夜の光景と昼の光景ほどの違いがある。多くの脳科学者は、心は脳の働きであり、内的な心の経験はすべて脳内の物質的物理的な現象が引き起こしているとは断定するが、この異質ともいふべき違いをどう説明するのか。脳内の物理的現象と心的な経験とは確かにつながりがあっても脳内現象に心の働きの総てはおさまるとは簡単にはいえないのではないか。心の表面部分には脳に關係しているが、心の微細で深い部分は脳を超えているとの説もある。そうであるなら脳機能の停止(死)は心の働きの消滅であるとは断定できない。